

# 芸術におけるオルテガ

Ortega y Gasset in Arts

木下智統

Tomonori KINOSHITA

## 1. はじめに

ホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset 1883-1955) は、日本でもその名を知られた20世紀のスペインを代表する哲学者、思想家である。彼の著作は祖国のみならず、ヨーロッパやアメリカ大陸においても積極的に受け入れられ、特にドイツにおける名声は確固たる地位を築くまでに至った。このため、ドイツ哲学が主流となっていた、当時の日本にもオルテガの思想は早い段階から導入され、検討されてきた。

オルテガの思想が日本で紹介されて以降、現在に至るまで数多くの研究書、研究論文等が発表されてきたが、その内容は哲学、思想、歴史学、社会学、教育学（大学論）、芸術、文学、人間学、そして倫理学など、多領域に亘っている。このことはオルテガが実に広い思想領域を持っていたことを裏付けるとともに、それらのひとつひとつが研究に値するものであることを物語っている。

本論考はこのように広がりを持ったオルテガ思想のうち、特に芸術の領域における受容に焦点を絞り、彼の思想の導入が日本の研究者たちにどう受け入れられたかを考察するものである。なお、我が国においてこうした観点からの先行研究が欠如していることをまずは指摘する一方、具体的な検討は芸術の領域におけるオルテガ研究を丹念に追っていくこ

とでその一端を明らかとしていきたい。

## 2. オルテガ思想と芸術

オルテガは1930年に、後に彼の主著となる『大衆の反逆』 (*La rebelión de las masas*, 1930) を発表し、哲学を基にした大衆論、大衆社会論を世に問うた。同書でオルテガは、社会を構成する要素として大衆と少数者という二つの概念を提示し、それぞれについて考察を行った後、それまでの大衆という概念とは異なる、新たな人間のタイプとしての「大衆」の概念を生み出した。大衆、少数者、そして新しいタイプとしての「大衆」が台頭する社会について、オルテガの生・理性哲学を基に分析を行ったのである。このようにオルテガの思想は現状に対する丹念な考察、分析から新たな概念の提示へと歩みを進めることが少なくない。『大衆の反逆』はこうした姿勢がまさに顕著に表れた書と言え、新たに提示された概念に対して多くの研究者たちが高い評価を送る所以となっている。

だが、こうしたことは何も彼が著した、この大衆社会論の書に留まらない。オルテガが記した書物は多領域にわたるものであり、そうしたことはすでに広く知られるところとなっている。無論、彼が考察の対象とした領域である、哲学、思想、歴史学、社会学、教育学（大学論）、芸術、文学、人間学、そし

て倫理学等のすべてが等しく日本の社会において認知されているとはいいい難く、その程度にはいまだ大きな開きがある。こうしたことはこれまでに刊行された研究書や論文から推察されよう。また、オルテガ自身が書き記した作品数も先に挙げた領域毎に等しく、均等に著されているわけではない。このため、領域による認知の差は当然のことと言える。そしてこうした理由に加え、または何にも増して、オルテガのどの領域の思想が日本の人々の琴線に触れるかどうかともオルテガ思想の認知に大きく関係することは間違いない。そもそも、『大衆の反逆』は日本の社会でも現実のものとなった、大衆社会の到来とそこに潜む大衆の質的变化の問題について扱ったものであったため、人々の興味を引いてきたのであろう。つまりは現状の社会問題に対する処方箋を探求するための受容が認知へとつながったという一面も否定できないのである。

このように、広範囲にわたるオルテガの思想は、一方で、大衆論のように社会学、哲学、そして思想の領域で深く受容されている場合もあれば、他方、先に挙げた様々な理由によって、浅い受容に留まっているものに分けることができる。こうした日本におけるオルテガ思想の受容について、これまでの拙稿における分析<sup>1)</sup>からその内容を少しずつ明らかにすることが可能となってきた。こうした中、いまだ浅い受容に留まってはいるものの、他の領域とは異なるかたちの受容が見受けられる領域に、オルテガの芸術思想がある。芸術の領域は日本における研究が他の領域に比べると進展しているとはいいい難い。しかしながら、興味深いことにオルテガが芸術に関して著した作品は他の領域と比べて、意外に多く

残されており、一見するとなぜ研究が進んでいないのかが疑問に思えるほどである。このことの要因は後に明らかになるものとして、まずはオルテガが芸術に関して書き残した作品について主たるものを挙げる。

まず、オルテガの芸術思想の中心となるものとして、「美術における視点について」(Sobre el punto de vista en las artes, 1924)、「芸術の非人間化」(La deshumanización del arte, 1925)を取り上げねばならないであろう。特に、後者は日本における受容において、その根幹をなすものであり、後に取り上げる研究者たちにとっても欠かすことのできない検討対象とされてきた。また、スペインが誇る偉大な画家について扱った、「ゴヤ論」(Goya, 1958)、「ベラスケス論」(Velázquez, 1959)もオルテガの芸術思想を検討する上で外すことのできない作品である。以上の四作品は、これまで幾度かの翻訳が重ねられ、その重要性から白水社によって出版されている『オルテガ著作集3』にも収められている。なお、オルテガが美術について扱った作品はこの他にも認められるが、本論考では、日本におけるオルテガの芸術思想の受容を主題としているため、後に取り上げる研究者たちが主たる検討対象とした作品を扱うこととする。

それではこれらの作品を対象として、日本の研究者たちはどのようにオルテガの芸術思想と向き合ったのであろうか。以下、オルテガの芸術思想を受容した人々について、受容の出発点として池島重信、本格的な研究を開始した神吉敬三、そして各研究者の三つの視点に分け、それぞれを順を追って取り上げることにより、受容の要因を考えていきたい。

### 3. 芸術におけるオルテガ思想の受容 — 池島重信

日本におけるオルテガの芸術思想の受容

1) オルテガ思想の導入史としての観点からの研究は拙稿、「日本におけるオルテガ思想の初期受容—その過程と要因に関する一考察—」から「オルテガ研究の深化と細分化」までを参照されたい。

は、1933年にオルテガ研究が開始されてから程なくして池島重信<sup>2)</sup>による翻訳から始められた。彼は1938年、四つのオルテガ著作の翻訳を一つにまとめた、『現代文化學序説』を刊行した。同書にはそれら四作品の内の一つとして「芸術の非人間化」が収められており、この翻訳が日本における同作品の最初の翻訳である。池島はこの刊行の前年に、『現代の課題』の翻訳書を出版しているが、その中ではすでにオルテガの理解が芸術の範囲にまで及んでいることを指摘している。

オルテガは歴史を決定したあらゆる芸術作品に対して行き届いた理解を示す一方、晦渋と言われているドイツの精神科学に対しても精密な知識をもっている。また深奥を誇る東洋思想への悟入があるかと思えば、感性の極致を誇るフランス文化に対する味解も容易に他の追随を許さぬものがある。しかもそこにはドイツの専門的偏狭と没趣味とを脱し、フランス風の精神的狭隘と遊戯性とを免れた自由闊達な精神が浸透している<sup>3)</sup>。

このように、池島は各国の両極端な印象をもってオルテガを紹介することにより、国籍としてはスペイン人であれども、その中身は各国がもつ長所のみを兼ね備えた存在であることを述べている。また、芸術に関して言えばスペインをはじめ、どの国の芸術について理解を示しているか、その限定がなされていない。つまり、池島はその「理解」がスペインのみにとどまらないと捉えていたことがここからうかがえよう。こうしたオルテガがもつ、他分野に対する理解の幅広さは、池島の

次なる翻訳書、『現代文化學序説』においても同様に紹介されている。

彼（オルテガ、筆者注）の博学は誰でも驚嘆するところで、（・・・中略・・・）この意味では、哲学の専門家、文藝の専門家、美術の専門家、音楽の専門家、政治の専門家等々、各文化領域の専門家のみあって、文化の全体的把握の達人の殆んど皆無と言ってよい日本の現在の思想界に、オルテガの著作はすくなくからざる示唆を与えると信ずる<sup>4)</sup>。

このように、「博学」との表現で形容されているオルテガは、「美術の専門家」をも内包する存在であることが述べられている。池島はオルテガ思想導入の初期段階における研究者として、日本におけるオルテガ思想の受容に最も貢献した人物であった<sup>5)</sup>。しかしながら、彼は専らオルテガ作品の翻訳とオルテガ思想の根底にある哲学について、考察を展開した研究者であった。そのため、彼がオルテガの芸術思想について検討を進めたものは残されていない。つまり、オルテガの考察や理解が芸術の範囲にまで及んでいることを提示したものの、その中身については具体的な検討を行わなかったのである。池島以降、具体性をもってオルテガの芸術思想の受容が認められるのは、それから30年ほど経た後のことである。しかしながら、池島が「『芸術の非人間化』は彼（オルテガ、筆者注）の芸術論に当るもの<sup>6)</sup>」と述べて、オルテガの思想に芸術の領域が存在することを明らかとし、後にはじまる芸術領域の研究に、翻訳をもつ

2) 池島の著作について、本論考の引用に際しては、旧仮名遣い、旧字体はそれぞれ新仮名遣い、新字体に改めた。

3) 池島重信『現代の課題』、p.2.

4) 池島重信『現代文化學序説』、pp.2-3.

5) 池島に関するオルテガ思想の受容については特に、「日本におけるオルテガ思想の初期受容 —その過程と要因に関する一考察—」を参照されたい。

6) 池島重信『現代文化學序説』、p.4.

てその出発点を提供したことはこの分野における彼の功績と言える。

#### 4. 芸術におけるオルテガ思想の受容——

##### 神吉敬三

オルテガの芸術思想はオルテガが持つ幅広い思想の分野の一つに過ぎない。しかしながら、日本においてその本格的な研究が開始されるには、池島が最初に受容してからずいぶん時間を要した。その間、我が国においてオルテガの研究がなされなかったというわけではない。彼の主著、『大衆の反逆』をはじめ、様々なオルテガの著作が翻訳され、検討が加えられていた。ではなぜ、芸術の分野は受容に時間を要したのであろうか。ここでは、受容の要因に加えて、こうした点をオルテガの芸術思想研究における第一人者、神吉敬三を通して考えてみたい。

神吉はオルテガの芸術思想研究者、と言うより第一義的にはスペイン美術の専門家と言った方がより一般的であろう。彼の紹介については元国立西洋美術館長の高階秀爾が追悼の意を込めて寄せたものが残されているのでそちらを引用する。

わが国におけるスペイン美術史の本格的な研究は、神吉さんから始まったと言ってよい。グレコ、ベラスケスからゴヤを経て、ピカソ、ミロにいたるまで、あるいはアルハンブラの壮麗な空間表現からガウディの豊饒な建築まで、スペイン美術のあらゆる領域において、神吉さんは多くの論文、翻訳、解説を精力的に発表し、困難な展覧会開催に忍耐強く取り組み、学会の論議には積極的に参加して、その後のスペイン美術研究への道を果敢に切り拓かれた。イベリア半島のみならず、メキシコの古代遺跡や、南米の

バロック芸術に対しても、旺盛な知的好奇心を発揮して、熱心に研究を進めておられた。日本の切支丹美術研究に数々の貢献をなされたことも、忘れられない<sup>7)</sup>。

このようにスペイン美術研究の発展に大きな足跡を残す神吉だが、その業績は何も美術分野だけに留まらない。神吉は高度なスペイン語力を駆使し、オルテガについても研究を進めた人物であった。それは彼がオルテガの『大衆の反逆』の翻訳を手がけたことから理解され、また、オルテガの哲学を根底とした大衆論についても論文<sup>8)</sup>を著していることから判断できよう。スペイン美術研究者、大高保二郎が「真に学問的な水準でのスペイン美術史研究、とりわけスペイン語の文献を駆使しての本格的な紹介と研究は神吉先生が草分けであり、まさしくパイオニアであった<sup>9)</sup>」と述べているが、このことはスペイン美術のみならず、オルテガ研究においても当てはまるのである。

さて、オルテガの芸術思想を提示した池島の後、初めてオルテガの芸術思想について本格的な研究を進めた神吉であったが、彼はなぜオルテガを受容したのであろうか。オルテガとの出会い、受容の出発点を辿ることはその要因を考える上で非常に重要な意味を持つ。すでに述べたように、神吉は大衆論を含めたオルテガの哲学とオルテガの美術思想の二つの領域について研究を残しているが、一見すると、哲学者、思想家としてのオルテガは他領域の存在であったはずである。この理由について神吉は、『大衆の反逆』の「あとがき」において次のように述べている。

7) 神吉敬三『巨匠たちのスペイン』, p.3.

8) 神吉敬三「超近代の思想家 オルテガ(危機の思想家4)」を参照のこと。

9) 神吉敬三『巨匠たちのスペイン』, p.484.

私事に及んで恐縮だが、わたしがオルテガの著作に初めて接したのは、十年前、マドリードで学生生活を送っている時だった。その作品は彼の芸術論の一冊であったが、その後今日のスペインの哲学界が、事実上オルテガ左派とオルテガ右派から形成されているばかりでなく、若い世代の思考方法および表現形式にまでオルテガの強い影響が認められる事実を体験し、次第にわたしの専門外の分野に属する彼の著作も読むようになった。その中で最も感銘を受けた著作の一つがこの『大衆の反逆』である<sup>10)</sup>。

こうして、最初は自らの専門である芸術分野に関するオルテガの著作に触れていた神吉は、次第にその対象を広げ、そうした中で『大衆の反逆』に出会ったのである。ここで神吉が芸術の範囲に留まらず、オルテガの哲学、思想の領域へと歩みを進めた理由が重要であろう。それは、この文面にあるとおり、当時のスペインの学問状況、ならびに人々の知的活動に対するオルテガの影響は計り知れないものであったためである。こうした体感が神吉の知的好奇心をかきたてたのか、または単に好奇心という段階ではなく、必要性を認識させたのかは定かではない。しかしながら、神吉のオルテガ理解はその後、哲学、思想の部分を完全に網羅するにまで達していた。いや、もしかすればこれらに加えて、他の領域まで彼の理解は及んでいたのかもしれない。残念ながら、神吉はオルテガの思想、全般に関する記述を残さなかったため、完全なるオルテガ理解へと辿り着いたかどうかは定かではない。だが、少なくとも、オルテガ思想のすべてが込められていると言って過言ではない、

『大衆の反逆』におけるオルテガの思想については、完全なる理解に達していたことは間違いない。そして、これに加え、芸術の領域についても同様である。このことはオルテガの芸術思想を解説する、次なる文面から明らかである。

オルテガにとって、芸術もしくは美術そのものが思索の最終目標であったことは一度もなかった。率直に言って、オルテガの芸術論および芸術家の伝記は、より総括的な目標へ到達するための手段としての役割、より大きな体系の一断片としての位置を与えられているに過ぎない。結論的にいえば、すでに刊行された五巻の訳者たちによって解説されている彼の思想体系、つまり、「私は私と私の環境である」という根本命題に発する基本的現実としての私、生・理性、歴史理性、パースペクティブ、その他、社会、危機の理論等を実証する一例であり、理論構築のための素材なのである<sup>11)</sup>。

このように、神吉はオルテガの哲学、思想を完全に理解した結果、オルテガにとっての芸術思想とは自らの哲学、思想を構成する、一断片に過ぎないことを認識するのである。つまり、オルテガの芸術思想とはあくまでも哲学、思想を基盤として、芸術を解釈し、そこから表出されるものを再び、哲学、思想の考察へと用いる、という一連の考察過程における部分的な存在に他ならない。こうしてみると、オルテガの思想における芸術の領域は、ともすれば一つの領域として検討を進める意味を持つのか、という疑念を持たれることになるだろう。しかし、神吉はこうした点につ

10) 神吉敬三訳『大衆の反逆』, p.277.

11) 神吉敬三編訳『オルテガ著作集3』, pp.358-359.

いて、明確に否定することを忘れない。

しかし、この事実は、彼のこうした分野（芸術、筆者注）の著作の価値を下げるものではない。全体なき部分が無意味であるように、部分を欠く全体もまた不完全だからである。オルテガの芸術論と伝記は、彼の思想体系という緑に燃える壮大な森に欠かしえない一本の大樹であり、その茂みなのである<sup>12)</sup>。

オルテガの芸術思想にふれることから生まれた神吉のオルテガ受容は、哲学、思想へとその対象を広げ、オルテガの思想体系とそれぞれの領域の関係性の理解へとつながるのであった。そうした中で、オルテガにとって芸術を考察することが最たる目的ではないことを認識する一方、オルテガの芸術思想が彼の思想体系を構成する上で、ささやかな一部分に過ぎないのではなく、むしろ欠かすことのできない、重要な意味を持つものとの認識に至るのである。そして、神吉はここにスペイン芸術を理解する上で、オルテガの芸術思想が果たす有用性を感じたのではないだろうか。よく知られているように、オルテガの哲学、思想は歴史と社会に対する徹底した考察を基にして緻密に組み上げられている。すなわち、オルテガの芸術思想が、歴史と社会を徹底して考察したオルテガ思想全体の一部分を構成するのであれば、それは同時に歴史と社会の精査を経たものとなる。芸術が人間によって生み出され、歴史と社会を映す鏡である以上、オルテガの芸術思想はスペイン芸術を考察する上で、欠かすことのできない重要な意義を持つことになる。事実、神吉はスペイン美術に関する著作や解説などにおいて

度々、オルテガを用いている。このことについて、先に挙げた大高は次のように述べている。

本選集をあらためて読み返してみると、「スペイン人とは何か」、その生と死をめぐるの根源的な問いかけと、先生のスペイン美術に対する情熱がよみがえってくる。その意味では、様式論や図像学で緻密に構築する、いわゆる美術史論集ではなかろう。とはいえ、たとえばエル・グレコ、ピカソなどの一作一作の絵の成立には、ヨーロッパはもとよりイスラムや東方的世界からの多彩なスタイルやモチーフが微妙に絡まりあう一方で、それ以上に、その時代、その社会の“生 (la vida)”のあり様が作品の存立基盤を決定づけている。しばしば引用、また言及されるオルテガやウナムーノの哲学や思想はスペイン美術の考察においては、無視できないのである。そのことは、幅広い仕事ぶりの業績リストからも明らかで、先生の美術論は偏狭な学問主義に収まるものではない<sup>13)</sup>。

さて、ここまで論を進めてくると、池島がオルテガの芸術思想を提示した後、他の領域と比べて、本格的な受容に多くの時間を要した理由が明らかとなったのではないだろうか。神吉がオルテガの芸術思想を受容の契機として、オルテガの哲学、思想へとその理解を深めたように、オルテガの芸術思想は単に芸術という枠組みで捉えようとしても、その実は哲学、思想が根底に横たわっている。つまり、オルテガの思想は芸術の領域と言えども、哲学、思想と切り離されたものではない。そればかりか、一体を成すものであるが故に、

12) 同上, p.359.

13) 神吉敬三『巨匠たちのスペイン』, p.485.

オルテガによって厳格な考察が幾度となく加えられ、思想として汎用性を持つのである。こうしたことから、オルテガの芸術思想はオルテガの哲学、思想への理解を必然的に要求するのである。

## 5. 芸術におけるオルテガ思想の受容 —各研究者

ここまでオルテガの芸術思想について、池島と神吉の受容を検討してきたが、最後に両者以外の研究者たちの受容について主だったものを取り上げ、その特質を検討してみたい。

すでに見たとおり、神吉はオルテガの思想について、芸術の領域に加え、哲学、思想の領域にまで丹念な検討を行い、オルテガの思想研究のみならず、スペイン芸術についても多大な足跡を残した。しかし、神吉がオルテガの芸術論をまとめた翻訳集、『オルテガ著作集3』を世に送り出したのとはほぼ同時期、オルテガの芸術思想とスペイン芸術に関する論文を著した人物がいた。それはロシア美術を専門とする研究者、山田幸平である。彼の「オルテガとスペイン芸術」と題する論文では、「ピカソやダリやミロなど、二十世紀に、スペインが送り出した近代芸術の前衛たちと共に、オルテガの思想は、透明にスペインの風土を映し出している<sup>14)</sup>」と述べられているように、オルテガの思想は何も芸術の領域にのみ限定されているものではなく、社会全体に批判、検討を加える幅広いものとしてとらえられている。そしてその根底には、山田がオルテガについて、「つねに自己の生命の流れと理性の働きを無媒介に、生即理性として裸のまま自然の前に置くことを念願している<sup>15)</sup>」、と述べているように、オルテガの生

理性哲学の存在が認められるのである。こうして、山田が神吉と同様、オルテガの芸術思想を考察する上で、オルテガの哲学、思想にまで理解を進めたことがうかがい知ることができる。だが、山田はこの論文以外にオルテガを考察することがなかったため、彼がオルテガの思想を「きわめて洗練された哲学的思惟<sup>16)</sup>」と捉えていたものの、どの程度、オルテガの哲学、思想について研究を進めていたかは明らかとはなっていない。

さて、最後に、神吉や山田とは対照的な私たちとしてのオルテガの芸術思想の受容について挙げておく。遠藤恒雄はベラスケスを考察対象とした論文<sup>17)</sup>において、オルテガの「ベラスケス論」を部分的に参考としながらテーマの検討を進めた。また、ドイツ語圏を中心とする美学理論の研究者、小田部胤久は人間的芸術が辿った軌跡を考察する上で、オルテガの「芸術の非人間化」について、その中で展開されているオルテガの議論の意義と問題点を検討した。このように、両者においては、オルテガの芸術思想そのものが設定した主題の考察に必要であったため、オルテガの哲学、思想についてまで研究を進めることはなかった。こうしたことはオルテガの芸術思想の受容の一つの形とは言えるが、神吉らとは違い、オルテガの芸術思想の領域とオルテガの哲学、思想の領域とを切り離した私たちとしての受容であることが指摘できるだろう。

## 結論に代えて

本論考では、哲学、思想といった分野に留まらず、多領域にまで広がりを持ったオルテガ思想のうち、特に芸術の領域における受容

14) 山田幸平、「オルテガとスペイン芸術—世界芸術論の焦点2」, p.80.

15) 同上, p.79.

16) 同上, p.76.

17) 遠藤恒雄「ベラスケス初期作品の一考察—ポデゴネス絵画の意義」.

に焦点を絞り、彼の思想が日本の研究者たちにどう受け入れられたかについて検討を行ってきた。最後にこの過程で明らかとなった点について指摘を行い、本論考の結論に代える。

すでに見たとおり、オルテガは芸術の領域に関しても思索を重ね、その思想を書き遺した人物であった。「芸術の非人間化」を初めとする一連の書物は彼の芸術思想を探るべく、後の研究者たちにとって重要な意味を持った。しかし、こうした作品の導入に力を尽くし、オルテガの芸術思想研究の出発点をつくったのは、本来、美術の領域とは無縁の池島であった。池島は日本にオルテガの思想が導入された初期段階から、オルテガの考察や理解が芸術の範囲にまで及んでいることを提示したものの、その中身について具体的な検討を行うことはなかった。

池島以降、初めてオルテガの芸術思想について本格的な研究を展開したのは、日本におけるスペイン美術の第一人者、神吉であった。彼はスペインにおけるオルテガの影響の大きさを認識すると、芸術の領域に留まることなく、オルテガの哲学、思想へとその理解を進めていった。その結果、オルテガの芸術思想とはあくまでも哲学、思想を基盤として芸術を解釈し、そこから表出されるものを再び、哲学、思想の考察へと用いる、という一連の考察過程における部分的な存在に他ならないという理解に達するのである。とは言え、オルテガの芸術思想が彼の思想体系を構成する上で、ささやかな一部分に過ぎないのではなく、むしろ欠かすことのできない、重要な意味を持つことも理解していた。

このように、神吉はオルテガの芸術思想とオルテガの哲学、思想との一体性を提示したが、同様の認識は山田にもあったことが彼の論文を通して理解されよう。一方、神吉や山田とは異なり、遠藤や小田部のようにオルテ

ガの芸術思想のみを扱う研究者も確認された。彼らはオルテガの哲学、思想について研究を進めることはなかったため、ここにオルテガの芸術思想とオルテガの哲学、思想とを切り離れた形としての受容を認めることができる。

総じて、オルテガの思想は芸術の領域と言えども、哲学、思想と切り離されたものではなく、そればかりか、一体を成すものであることが明らかとなった。そのため、オルテガの芸術思想を突き詰めて検討することはオルテガの哲学、思想への理解を必然的に要求するのである。このことがオルテガの芸術分野における受容の進展と大きく関係しているのではないだろうか。

## 参考文献

- 遠藤恒雄「ペラスケス初期作品の一考察：ボデゴネス絵画の意義」『美学』21(2), 1970年, pp.21-47.
- 神吉敬三「超近代の思想家 オルテガ（危機の思想家4）」『自由』12(9), 1970年, pp.222-230.
- 『巨匠たちのスペイン』毎日新聞社, 1997年.
- 木下智統「日本におけるオルテガ思想の初期受容 —その過程と要因に関する一考察—」『金城学院大学論集』社会科学編9(1), 2012年, pp.130-139.
- 「オルテガ研究の深化と細分化」『金城学院大学論集』社会科学編11(1), 2014年, pp.55-63.
- オルテガ, J., 池島重信訳『現代の課題』刀江書院, 1937年.
- , 池島重信訳「現代の課題」「芸術の非人間化」「小説の考察」「知性の改造」『現代文化學序説 現代思想全書15』三笠書房, 1938年.
- , 神吉敬三編訳「芸術における視点について」「芸術の非人間化」「ペラスケス論」「ゴヤ論」『オルテガ著作集3』白水社, 1970年.
- , 神吉敬三訳『大衆の反逆』筑摩書房,

1995年.

小田部胤久「人間的芸術の行方：20世紀前半における芸術終焉論の一変奏」『美学藝術学研究』20, 2002年, pp.123-154.

山田幸平「オルテガとスペイン芸術—世界芸術論の焦点2」『三彩』196, 1966年, pp.76-80.